言語の変化 自然の法則

■ 識者に聞く

東大准教授 酒井 邦嘉（さかい くによし）氏

双子の子供は、つうかあの仲なので、言葉はどんどん節約され短くなる。大人にとっては暗号化したように見える。日本語のクレオール化Ⓜだ。

世代や場所によって、言語は変化する。大人の目には若者世代の言葉は「乱れている」と映るが、自然法則に基づいたクレオール化に過ぎない。国家が国語を定めたところで、それは話し手が内発的に生み出すクレオール言語ではない。若い脳は自ら言葉を作り、足りなければ補う。

「行かない、行きます、行く、行けば、行け」という五段活用の法則は、学校で習うより前に、すでに幼稚園の子供が知っている。子供は自然に母語を身につける。

幼児が成長の過程で耳にする言葉の量には限りがあり、しかも不完全な文章が多く含まれるのに、それでも子供は無限に近い言葉を発し、理解できるようになる。この矛盾は、古くはギリシャの哲学者プラトンが指摘している。

解決されたのは20世紀。米マサチューセッツ工科大学（MIT）のノーム・チョムスキー教授(79)が1957年に提唱した「普遍文法」というアイデアだった。人間の言語は、生得的に備わった能力によって生成されると考えた。

1964年東京生まれ。東大大学院理学系研究科博士課程修了。MIT研究員などを経て97年から現職。著書に「言語の脳科学」など。

クレオール化 外国との交易などに伴い親の世代が意思疎通のため作った単純な混合言語（ピジン言語）を、そこで育った子供の世代が文法規則を備えた自然言語に変化させ、独自の母語（クレオール言語）にすること。

Ⓤ「新しいものを生み出す創造性が人間の知性の根本」と話す酒井邦嘉・東大准教授Ⓓ首都大学東京が行っている英語学習時の脳活動の調査

日本の知力

〈1面続き〉

言語を担う脳の部位も解明が進んできた。文法や表出を担う中枢が損傷すると、聞いたことはわかるが発話できず、意味の理解の中枢が壊れると言葉は出るが意味をなさない。

だが、今でも人間に共通する普遍文法と、日本語や英語といった各国語との関係ははっきりしない。「脳言語」が最終的に各国の言語として表に出てくるわけだが、その過程は意識できない。何らかの「計算」をしているが、言葉は空気のように身近で見えない所で働いているため、我々は自然に出てくると錯覚する。

言語は理屈ではない。例外規則が多すぎ、書き記せない文法がたくさんある。だから子供は言語をまる覚えするのではなく、言語の法則を自分の力で発見していく。スポーツや音楽と同様、子供の時に体で覚えるという要素がある。

ただ、「だから英語も早期教育をすればいい」という結論にはつながらない。脳は個人差が大きい。自然界が作った一品料理だ。最大公約数的に、みんなに同じ教育を施すことが最適とは思えない。これからは脳科学でその人の個性を考えながら、その人に合った教育を、適切な時期に施すことが重要だ。

人間が知性を爆発的に開花させることができたのは、言語を獲得したからだ。知性とは、自分に備わった力を基に新しいものを生み出す力。教えられるものでも模倣するものでもない。

（聞き手・山田哲朗）